

篠原 徹

自然を歩く 13

【消えた原野】

タンザニアの広大なミオンボ林（乾燥疎開林）やケニアのサヴァンナに焼畑農耕民や遊牧民が自然に埋没して生活している。こうした焼畑農耕民の村から村、遊牧民のキャンプからキャンプへは数日歩かなければ辿りつけない無人の樹林やサヴァンナが横たわっている。自然への希有な感性をもつ人類学者・伊谷純一郎先生はここを自分の足で途方もない距離を歩きまわった。その折、伊谷さんは芭蕉の連句集を携えていた。歌仙『冬の日』の正平の付句「日のちり／＼に野に米を茹」の前句からの転換と、原野を歩いていてトングウエ族の村が突然現れた転換の光景を伊谷さんは同じ感覚であると確信した。伊谷さんが『冬の日』などの連句について「鋭利な自然描写と、弾性をもった連鎖と転換の妙」と評したことの具体的な例がこれである。そういえば彼はミオンボ林やサヴァンナの旅をまるで江戸時代を旅しているようだったと言っていたことを思い出す。那須野を歩く芭蕉の「秣負ふ人を枝折の夏野哉」や蕪村の「行々てこゝに行々夏野かな」などの句にみられる広大な原野は日本から消えてしまった。